

Dean Karlan and Jacob Appel,

Failing in the Field: What We Can Learn When Field Research Goes Wrong.

Princeton and Oxford: Princeton University Press,
2016, viii + 164pp.

たか はし かず し
高橋和志

研究では多くの場合、結果がすべてであり、そのプロセスが声高に語られることは少ない。ましてや、「失敗」したケースについてはなおさらである。しかし、エジソンが「失敗」を積み重ねていくなから、ついに成功をつかんだように、うまくいかないプロセスのなかに大事な教訓が含まれている場合もあるだろう。本書は、著者とその友人・共同研究者がかかわった開発経済学の実証研究で生じた「失敗」を紹介し、そこからの学びを共有しようという意図で書かれたものである。

開発経済学の実証研究の伝統的なアプローチは、研究者自らがフィールドに赴き、そこで見たことや聞いたことをもとに仮説を立てたり、現場で集めたデータを用いて仮説検証を行うものである。樋口 [2016] が手際よくまとめている通り、近年、そうした潮流に変化が起こりつつある。それは、伝統的な方法に加えて、より信頼性の高い因果推論を行うための手段として、ランダム化フィールド実験 (randomized field experiment: RFE) を採り入れることが一大ブームとなっていることである (RFE を用いた近年の実証研究の成果は高橋 [2015] にも簡単に紹介されている)。RFE は通常、特定の介入の因果的影響効果を識別できるように、研究者が全体を企画・デザインし、現地の実施機関と協力して実行に移される。

伝統的なフィールド調査と比べ、RFE では、パートナーとなる機関の選定、実験場所の選定、研究に賛同してくれる現地被験者 (途上国住民) の選定、

介入前の被験者の状況調査 (ベースライン・サーベイ)、実験に必要な資機材の調達、パートナー機関のスタッフへの実験内容の説明やトレーニング、被験者のランダム割り付け、実験の施行、介入後の被験者の状況調査 (エンドライン・サーベイ) など、研究者および協力機関が担うべき仕事が多くなる。それゆえ、当初の思惑通りに事が運ばない、いわゆる「失敗」を犯す機会も必然的に増えていく。

本書は、こうした RFE の実施に伴う「失敗」を以下の 5 つに類型化し、それぞれについて、簡単な例とともに紹介をしている。

1. 不適当な研究環境 (inappropriate research setting)

これには、第 1 に「タイムマネジメントのミス」がある。例えば、養鶏のためのマイクロ融資を企画したが、ソフトウェアのアップグレードに予想外に手間取った結果、実施時期が乾季から雨季にずれ込み、養鶏そのものが難しくなってしまったなどである。第 2 に「実行可能性の低い計画」がある。例えば、実施費用を節約するために、金融リテラシーのトレーニングにレンタルした DVD を利用する計画を立てていたが、レンタルするあてがなく、必要な数を入手することができなかつたなどである。

2. 研究デザインの技術的欠陥 (technical design flaws)

これには、第 1 に「調査デザインへのミス」がある。例えば、使う意図がはっきりしないまま、質問項目を膨らませ、回答者を疲弊させたり、ダブルチェックする目的で同じような質問を違う方法でたずね、それらに対し異なった答えが返ってきた場合にどちらを使うか決めかねてしまうなどである。第 2 に「不適当な調査対象者を含むこと」が挙げられる。例えば、調査協力への謝礼をやや高めに設定してしまった結果、本来対象となるべき人でない人に調査に参加するインセンティブを与えてしまったが、個人をきちんと特定する ID システムがなかつたなどである。最後に、「ランダム割り付けやサンプルサイズの計算のミス」がある。例えば、ランダム割り付けをパートナー機関に任せただけの結果、本来すべきランダム化がなされなかつたり、クラスターレベル内の相関が高く、統計的検出力が想定よりも弱くなつ

てしまうなどである。

3. パートナー機関の課題 (partner organization challenge)

これには、第1に「新しく複雑な業務に対する理解不足」がある。例えば、研究者はこれまで行われたことのない非常に新規性の高い政策介入の効果を検証することに価値を見出すが、実行を手伝うパートナー機関のスタッフがその意図を十分理解できなかったり、実行しやすいように内容を加工してしまい、本来試したいことが試せなくなるなどである。第2に「通常業務との競合」がある。例えば、研究者にとってはRFEを成功させることこそが重要であるが、パートナー機関のスタッフはRFEの遂行以外にも様々な業務を行っており、忙しさにかまけて、RFEを研究者の指示通りに行わないなどである。そして「現実逃避」がある。例えば、実行途中で明らかに成果が見込めなくなり、スタッフがやる気を失ってしまうなどである。

4. 調査や計測の実行ミス (survey and measurement execution problems)

これには、第1に「調査そのもののミス」がある。例えば、紙とペンを使う伝統的な方法では、調査員の文字が汚かったり、インクがにじんで後で回答がわからなくなるほか、コンピューターを用いて行う最近の調査方法では、プログラムのバグによって、セクションそのものが飛ばされてしまうなどである。第2に「調査員の不正」がある。例えば、3時間ほどかかる長い調査のすべての回答を調査対象者から引き出すのではなく、調査員が一部ねつ造してしまうなどである。第3に「調査方法の不備」がある。例えば、遠隔読取可能なスキャナーを使って、ビジネスの在庫量を調査する装置を導入したが、時間もコストも通常の方法よりかかる上に、正確性に欠けるものであったなどである。

5. 低い参加率 (low participation rates)

これには、「調査そのものへの低い参加率」や、「ランダム割り付けの後での低い利用率」が含まれる。例えば、RFEでマイクロクレジットなどの介入を割り付けられたグループの関心が低く、サービスを利用する人が少なかった結果、統計的検出力が低く

なるなどである。

本書では、これらの類型化の後、6つのRFEの事例を取り上げ、背景、研究の意図、調査デザイン、実行計画の説明とともに、どのような「失敗」がどのように起こったか、そしてそこから何を学べるかについて、非常に具体的な描写をしている。

こうした「失敗」の数々は、列挙してみると実に平凡に見える。賢明な読者やRFEの経験も豊富にもつ研究者なら、なぜこうしたことが起こる前に予備調査や事前のテストを行わないのか不思議に思うだろう。実際、本書のなかでもたびたび触れられている「失敗からの学び」は、予備調査や事前のテストの実施、である。予備調査や事前のテストを行うことによって、DVDの現地調達可能性、不必要な質問項目、時間管理の困難さ、協力機関のスタッフの忙しさ、RFEへの低い参加率など、ここに取り上げられている問題の多くは発生が見え、本格的なRFEを実施する際の失敗が少なくなっていたに違いない。

しかし、実際には、時間や予算の制約から、RFEの事前テストを行うことは必ずしも容易ではない。評者もこれまで、アジアやアフリカで7つのRFEを手掛けてきたが、質問票の事前テストを除き、実験部分の事前テストを行ったことはない。そうした時間・予算制約のもとでRFEをやらざるをえないところに、「失敗」を犯してしまう余地が生まれるのだろう。本書は、そうした「失敗」を犯さないために、RFEの実施の際に気を付けるべきチェックリストをAppendixに掲載している。一見、平凡なことだからこそ、改めて各項目をチェックすることで思い出すことも多い。RFEを行う研究者は、本書読後、このAppendixを繰り返し読み、そこに書かれていることを日常の作業に採用することで、大きな「失敗」を減らすことができるのではないだろうか。なお、本書と関連して、これからRFEに取り組んでみようと思う人には、Glennster and Takavarasha [2013] も実践的なガイドとしてお勧めできる。

文献リスト

〈日本語文献〉

- 高橋和志 2015. 「開発経済学におけるフィールド実験の潮流」『経済セミナー』684 (6・7月号) 40-46.
- 樋口裕城 2016. 「開発経済学における計量的アプローチと実験的アプローチ」経済セミナー編集部編『経済セミナー増刊 進化する経済学の実証分析』日本評論社.

〈英語文献〉

- Glennester, Rachel. and Kudzai Takavarasha 2013. *Running Randomized Evaluations: A Practical Guide*. Princeton and Oxford: Princeton University Press.

(上智大学経済学部教授)